



THE DAILY ENGINEERING & CONSTRUCTION NEWS

# 日刊建設工事新聞

## 5月23日水曜日

第19431号

2018年(平成30年)

発行所 日刊建設工事新聞社  
〒106-0021 東京都港区新橋2-2-10  
電話03(3433)7151 http://www.decn.co.jp/  
〒106-0021 東京都港区新橋2-2-10  
電話03(3433)7151  
〒106-0021 東京都港区新橋2-2-10  
電話03(3433)7152  
〒106-0021 東京都港区新橋2-2-10  
電話03(3433)7154

### 〈12〉大河津分水、宮本武之輔の雪辱戦

竹林征三

## 明治維新150年と治水の歴史

(Equilibrium)は、神様の心の平静を意味する。分水路の低水路の幅員は上流ほど広く、下流ほど狭い。また分水路の河底勾配は上流ほど緩く、下流ほど急になっている。大自然の作品とは逆である。このような設計は時間の経過とともに安定していかない。平衡に向かいたいの神の意図に反するものである。未来永劫(えそう)した場合に徒にその責任の追求に急なるの余り、有為の技術家の前途を葬るが如きは努めて戒めねばならぬ。虎穴に入らずんば虎を捉えず。失敗を恐れて世に進歩は成りえない。怯懦(きんじゆ)とがなないならば、災禍は永遠の災禍たるに止まらずに国家の損失之より甚

宮本氏が上司である青山氏はの了解を得て、大河津可動堰の重大事故の原因の真実を後世のために記したのが『信濃川大河津自在堰の破壊と補修工事に就いて』(新編毎日新聞・1929年2月3日・14頁)である。その諸言に「古来技術的施設の失敗に帰した事例は決して少なくないけれど、そうした場合に徒にその責任の追求に急なるの余り、有為の技術家の前途を葬るが如きは努めて戒めねばならぬ。虎穴に入らずんば虎を捉えず。失敗を恐れて世に進歩は成りえない。怯懦(きんじゆ)とがなないならば、災禍は永遠の災禍たるに止まらずに国家の損失之より甚

わくは我技術家をして勇敢ならしめよ。ソコに始めて我技術界の向上があり進歩が望まれるであらう。それと同時に工事失敗の原因を秘密にして責任の所在を明らかにせず殊更に世の耳目を蔽はんとする事も極力避けなければならぬ」と書いてある。(怯懦―臆病で気が弱いこと、退嬰―尻込る結果、水叩きコンクリー掘を恣(ほしいまま)にせよ)と書いている。大河津可動堰修復工事は内務省直轄工事の面目のため雪辱戦であった。

「古来技術的施設の失敗に帰した事例は決して少なくないけれど、そうした場合に徒にその責任の追求に急なるの余り、有為の技術家の前途を葬るが如きは努めて戒めねばならぬ。虎穴に入らずんば虎を捉えず。失敗を恐れて世に進歩は成りえない。怯懦(きんじゆ)とがなないならば、災禍は永遠の災禍たるに止まらずに国家の損失之より甚

進歩発達の大敵である。願わくは我技術家をして勇敢ならしめよ。ソコに始めて我技術界の向上があり進歩が望まれるであらう。それと同時に工事失敗の原因を秘密にして責任の所在を明らかにせず殊更に世の耳目を蔽はんとする事も極力避けなければならぬ」と書いてある。(怯懦―臆病で気が弱いこと、退嬰―尻込る結果、水叩きコンクリー掘を恣(ほしいまま)にせよ)と書いている。大河津可動堰修復工事は内務省直轄工事の面目のため雪辱戦であった。

進歩発達の大敵である。願わくは我技術家をして勇敢ならしめよ。ソコに始めて我技術界の向上があり進歩が望まれるであらう。それと同時に工事失敗の原因を秘密にして責任の所在を明らかにせず殊更に世の耳目を蔽はんとする事も極力避けなければならぬ」と書いてある。(怯懦―臆病で気が弱いこと、退嬰―尻込る結果、水叩きコンクリー掘を恣(ほしいまま)にせよ)と書いている。大河津可動堰修復工事は内務省直轄工事の面目のため雪辱戦であった。

進歩発達の大敵である。願わくは我技術家をして勇敢ならしめよ。ソコに始めて我技術界の向上があり進歩が望まれるであらう。それと同時に工事失敗の原因を秘密にして責任の所在を明らかにせず殊更に世の耳目を蔽はんとする事も極力避けなければならぬ」と書いてある。(怯懦―臆病で気が弱いこと、退嬰―尻込る結果、水叩きコンクリー掘を恣(ほしいまま)にせよ)と書いている。大河津可動堰修復工事は内務省直轄工事の面目のため雪辱戦であった。

信濃川の大河津分水工事には、これまで大きな三つの失敗があった。その大失敗の原因は、万象に天意を悟らなかつたことで失敗を犯した先輩たちに対し、その責任を追及できないことに対する自戒の念である。一つ目は、自在堰を設計した岡部三郎氏に対するもので、自在堰の基礎地盤が浸食に対し脆弱(ぜいじやく)な地質であることに対する認識が不足していた。この基礎には不向きな自在堰を選定するという堰形式選定の基本事項に関わる失敗であった。二つ目は、大河津分水工事の中止を決断した人たちに對するものである。田沢実入氏は「信濃川治水論」の中で「リンド氏は内地の状況を暗せず、況や北越水害の深淺厚薄を…」と、現地のことをまったく理解

できていないあまりにも幼稚な外国人技師のリンド・ブライントンの意見をなげまくのかと激怒している。工事中止勧告を受け入れ、工事中止を決断した楠本正隆、具令の責任であった。三つ目の失敗は、天意に背く分水路の基本設計である。そもそも河川は天の神様の作品であり、天の意図は時の経緯とともに平衡に向かうものなのである。平衡